

公募推薦入試（11月21日）

出題傾向

解答時間は60分。現代文からの出題で、基本的に五者択一式のマークシート形式であるが、大問□では三十五字以内で書く記述問題が、大問□では四十字以内で書く記述問題が、大問□では五十字程度で書く記述問題がそれぞれ出題されていた。なお、初見では評論と随筆・エッセイの区別はしづらいが、大問□、□は評論から、大問□は随筆・エッセイ・小説などから出題される傾向にある。そして、設問は漢字問題、意味問題、傍線部や本文の内容・理由説明問題、本文内容合致問題、空欄補充問題、文整序問題、抜き出し問題など、多彩な設問が並んでいることが多い。なお、空欄補充問題も多彩で、接続詞や副詞などを入れる問題から語句や表現を入れる問題まで、こちらも幅広い。こうした空欄補充問題で高得点を取るには語彙力が必要だが、漢字問題が大問□で3問、大問□で2問、大問□で2問の合計7問出題されていることを踏まえると、漢字も含めた語彙力が重要になってくると言える。

大問□は、村岡晋一『名前の哲学』からの出題で、約2400字であった。本文内容合致問題や文整序問題、抜き出し問題などは出題されていなかったが、それ以外は上記の設問通りであった。

大問□は、三木那由他『話し手の意味の心理性と公共性』からの出題で、約2100字であった。意味問題や抜き出し問題などは出題されていなかったが、それ以外は上記の設問通りであった。

大問□は、原土洋『日本事情原論序説』からの出題で、約1000字であった。文整序問題などは出題されていなかったが、それ以外は上記の設問通りであった。

学習アドバイス

漢字問題が合計7問出題されていることを踏まえると、まずは漢字対策が必要であると言える。たとえ1日10分でも毎日続ければ、多様な漢字を覚えることができるだろう。また、漢字を覚えることが読解問題の対策にもつながる。文章がなかなか頭に入らないという受験生がいるかもしれないが、それは言葉をイメージするための語彙力が不足しているからである。読解問題が苦手な人も、漢字や語句を覚えてイメージできる箇所を増やしていただいたい。なお、上記の「出題傾向」で述べたように、多彩な問題が並んでいる。多様な読解問題や空欄補充問題に対応するためにも、語彙力は欠かせないと言える。

次に、読解問題の対策であるが、記述問題や本文・傍線部を問う問題では評論・随筆・エッセイ・小説に関係なく、設問や傍線部を正確に理解するという意識が必要である。もちろん文章を理解する力も必要だが、問題である以上、設問や傍線部を理解する力も必要である。よって片方に偏ることのないよう、文章を読むときと解くときとで意識を切り替えたい。つまり、文章を読むときは文章の理解を意識し、問題を解くときは頭を切り替えて、設問や傍

線部を理解するという意識を持つようにしたい。その際、設問や傍線部に近い箇所は本文のどの辺りだろうかと、探しながら解いてみるのも効果的である。

そして、記述問題の対策であるが、こちらも読解問題と同様、設問や傍線部に近い箇所を本文から探すようにしたい。時間制限があるので、該当箇所を素早く見つけることができるよう反復練習をしておきたい。

最後に、時間配分について述べたい。問題集を解くときも過去問を解くときも、制限時間を守るようにしたい。なぜなら、記述問題が各大問で出題されているにもかかわらず、制限時間は 60 分だからである。よって、時間が足りない受験生も出てくるだろうから、普段から時間配分を意識しながら解くようにしておきたい。時間配分は慣れてくるものなので、時間内に解けるように、何度も解いて反復練習をしておきたい。